

---

# 異世界で犬に憑依した

巨峰水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界で犬に憑依した

### 【Zコード】

N1919BA

### 【作者名】

巨峰水

### 【あらすじ】

平凡なサラリーマンだった男が交通事故で死んだ直後、目が覚めると何処とも知れぬ森の中だった。犬になつた体。空に浮かぶ三つの月。なぜか見えるステータス画面。わからないことは数あれど、とりあえず空腹を満たすために狩りに勤しむ日々。なりゆきで狼の群のボスになつたりもしながら、ある日、ゴブリンが攫つてきた少女を助けたことで、犬は人里に下りることになる。

処女作のため稚拙な駄文ですが、暇潰しにどうぞ読んでやって下さい。

## プロローグ

1.

私の名前は高坂隼人（たかさかやまと）。

ごく普通のサラリーマンだった。年は28歳の独身で、彼女ない歴は28年。つまりいたことがない。もうすぐ魔法使い（笑）になる、という以外は何の変哲もない人間で、断じて悪人などではなかつたのだ。

だと言うのに、私は畜生道に落とされた！

私がいつたい何をしたというのだ。

私は今、犬だ。

話は私の主観時間にして15分ほど前に遡る。

私はいつものように営業に出かけていた。そのついでにゲーセンに出かけて行列のできるラーメン屋で昼飯にした。べつにサボっているわけではない。単に仕事より息抜きの時間の方が多いだけだ。ちゃんと仕事をしている。

そんなこんなで退屈な、もとい、充実した仕事時間を切り上げよう、私は会社に戻るため営業車で高速に乗った。

時速100キロオーバーで車を走らせていると、私のケイタイが鳴った。運転中だが構わざ出ると、相手は会社の先輩だった。

『高坂、お前いまどこ！？』

『どうしたんすか先輩、そんなに慌てて』

『どうしたじやねえよバカッ！ お前今日吉田社長と打ち合わせだろ！？』

ちねみに吉田社長とは、私が担当する大口の取引先の社長である。私だって伊達に5年も働いてはいない。吉田社長の所は私自身が初めて開拓した大口の取引先なのだ。

「.....」

私は自身の記憶を思い返してみる。

するとあら不思議、今まで意識に登らなかつたのが不思議なほどにあつさりと、吉田社長との大切な打ち合わせの事が思い出せた。

マジヤバス。

吉田社長との打ち合わせが午前11時からで、今が午後4時過ぎだ。

『社長さつきこいつも来て、すっげー怒つてたぞ！ 今すぐ社長んとこ行つて謝つてこい！』

「わ、わかりましたっ！ い、今すぐ行つてきます！』

言い返して電話を切つた私は、慌てて吉田社長の電話番号を呼び出しながらもアクセルを最大まで踏み込んだ。

吉田社長も私に電話くらい入れてくれれば良いのに、と自分のことを棚に上げて思いもしたが、よくよく考えると吉田社長に教えたケイタイの番号は仕事用に使つてている方（私は二つのケイタイを私用と仕事用で使い分けているのだ）で、今もつてているのは私用のケイタイのみ。仕事用のケイタイは……と考えてすぐに答えは出た。家に忘れてきたのだった。

ともあれ、こちらのケイタイに吉田社長の番号が入つているのは不幸中の幸い、と言えるのか？

何度かの呼び出し音の後、『お掛けになつた電話番号は……』というアナウンスが流れる。

吉田社長が出ない。

ヤバい。

手のひらにじつとりと嫌な汗をかく。

ヤバい、ヤバい、ヤバい。

などと、そんなことばかり考えていたときだった。

ズルツと、ハンドルを握る手が滑つた。

「あッ！」と声を上げた時にはもう遅かつた。私は車ごと中央分離

帯へと突つ込み……

ふと目を開けると、森の中だった。

土と草木の独特的な匂いが混ざり合い、芳醇な森の香りとして私の鼻を刺激した。

（ど、どこだ、ここは……？）

もやもやはつきりしない意識を、頭を振つてどうにか覚醒させる。なんだか違和感を覚える身体を何とか動かし、私はしつかりと四肢で大地を踏みしめた。

.....。

そう、四肢で大地を踏みしめたのだ！

ええ、そうですとも。私は「ここはどこ？ 私は誰？」などとベタなことは申しませんし「なんだか身体がおかしいなあ」などと呑気な勘違いもしませんでしたとも。

自分の身体のことだ、すぐに異変には気付いた。（ど、どこだ、ここは……？）などと思ったのは单なる現実逃避だ。

まず第一に、身体の感覚が嗅覚をはじめとして異様に敏感だし、なにより立つた時の視界が異様に低い。四つん這いで立つことに全く違和感を感じないし、おまけに少し前までは存在しなかつた、新たな感覚がある。それが、尻の少し上から伸びている感じだ。

私は後ろを振り返つた。しかし「なぜか」首だけを回すことができなかつたので、身体ごとその場で回るよにしながら、自分の尻の辺りを見る。

ぐるぐると回り続ける私。そして視界に移る乳白色の、あるいはクリーム色の体毛に覆われた尻尾。

まるで「犬」のような尻尾だが、今の自分の顔を見たわけではないので断言することはできない。

鏡とかどつかないかな、とキヨロキヨロと辺りを見回してみる。鬱蒼と木々が生い茂る、深い森の中である。

富士の樹海に行つたことはないが、こんな感じなのかもしれないなあ。

そう思いながら視線を移動させていき……、私はここが地球ではないといつ確信を得た。

森の木々の梢の間から、まだ昼間のようなのに月が見えたのだ……

…… 3つも。

昼間に月が見えるのは良い。地球でも良く朝方とか見えたし。しかし、地球の月は3つもないのだった。それとも、私が知らない間に月が一つ増えたという可能性も……ないな。

「………… ウオフ……」

まあ、いい。良く分からることは後回しだ。

乳白色の体毛。尻尾。三つの月。森の中。

色々と気になることはあるが、まずはさらに情報を集めてみるとにしよう。

まず第一に、私の身体が犬であれ何であれ「子供」ではない、といふことだ。これがまだ目も開けられないほどの赤子で、目の前に母親などいれば、たんに転生したのだと納得できるのだが、私の身体は成獣（？）だ。周りを見渡してみると、私以外は誰も（というか何の動物も）見当たらない。

次に足の裏にある肉球をぽむぽむしてみると。

別になごみたいわけではない。肉球の硬さを調べていたのだ。もし私が生まれたばかりなら、肉球は柔らかいはずだが、触つてみた感じ、私の肉球は堅いようだ。これは今の私の身体が、硬い地面の上なり何なりを走り続けたり歩き続けたりしていた証拠だ。

以上のことから、これが夢でなければ私はどうやらこの身体（犬？）に憑依したらしい。

なんてこつた。

「クウ～ン……」

悲しげな泣き声が私の口から洩れる。

憑依、ということは私はやはり死んでしまったのか。最後の記憶

は高速で中央分離帯に突っ込む場面だが、あれで奇跡的に生きている、なんてこともないと思うしな。  
.....。

まあ、吉田社長や会社の先輩、上司に怒られなくなつたのは喜ばしいことかな、と考えてみる。

両親に親孝行などできなかつたのは少々心残りではあるが、そんなことよりは今の我が身である。

犬？

それが今の私である。

これが畜生道に墮ちる、ということなのか。理不尽だ。私は少々ばかり不真面目ではあつたが、悪人ではなかつたというのに。もし神というものがいるなら、盛大に文句を言いたい。

犬て。人間にしてほしい。

はやく人間になりた～い、とでも言えれば良いのか。

3 .

私は途方に暮れていた。

このどことも知れぬ森の中で目を覚ましてから、どのくらいたつただろうか。空は青空から夜空に変わり、満天の星空と三つの月が、煌々と大地を照らしている。

実は少し前から腹が減つている。

それで色々悩むのは後回しにして、何か食べるものを探しに行こうと思うのだが、こんな森で食べられるものなど見つけられるだろうか？

キノコ……は毒があつたら嫌だし、草とかも同じ理由で食べたくない。毒の有無なんて見分けられないしなあ。

なにか果物とか生つてれば、と思い、それが木の上にあつたらどうやつて採ろう？ と悩む。

私は地面に鼻を近づけ、スンスンといろいろな物の匂いの残滓を

嗅ぎ取りながら、自分がうまそうと感じる匂いを追つていいく。

……理性的にこんな犬のような真似をしているのではない。食い物を探しに行こうと思つたら、自然と身体が動いていたのだ。

しばらく森の中を進んでいると、「食糧」を見つけた。

白い体毛に覆われた小柄な体躯。ぴょんぴょんと跳ねる小さな身体に長い耳、赤いつぶらな瞳。額から30センチくらいの角が伸びているところが記憶にあるものとは違うが、たぶん異世界だからだらうと納得する。

ウサギである。

どこからどう見てもウサギである。

おいおい、と思った。バターでおいしくニールされているウサギ肉とは違うのである。生きているそのままのウサギだ。ここには調理器具もなければ、この身体では火も熾せない。そもそも捌くことすらできないだろう、となれば必然、このウサギを食つにはそのままかぶりつくほかない。

ないわー、と思いながらも、意思に反して私の口からはよだれが。視線の先にいるウサギ（仮にホーンラビットと呼ぶことにしよう）に気づかれないよう姿勢を低くする。ゆっくりと足音を立てないように、ホーンラビットの背後へ回る。

四肢に力を入れていつでも飛びだせるようになる。

「グルル……」

知らず、獰猛な唸り声が漏れる。

うむ。この距離なら逃げられることはないだらう。

いやだわー、と人間だった頃の私は思うが、今はこの犬としての私が強い。

私は一気に飛び出した。全力で距離を詰める私に、ホーンラビットも気づき慌てて逃げようとするが、もう遅い。というか、田の前のウサギより私の方が圧倒的に足が速いのだ。逃げられるはずもない。

もうあと3メートル、というところで私はホーンラビットに跳びかかつた。

狙い過たずホーンラビットの首筋に噛みつく私。ホーンラビットが抵抗するように暴れるが、それもすぐに止んだ。

こんなに大きな動物を殺したのは、人間だった頃を含めても初めてだ。

普通だつたら気持ち悪くなつたりしそうなものが、そんなことはなく、すぐにホーンラビットの腹に牙を突き立てていた。たぶんこの犬？の知識だろう。はらわたが柔らかくて一番うまいのだ、ということがなぜか解つた。

腹の毛皮を噛みちぎり、その下の肉へと牙を突き立てようとしたところで、

## ローン

と、実際に音が鳴つたわけではない。ただそんな音が聞こえた気がしただけであり、けれどそれだけではなかつた。何かを私に伝えるような「感じ」

額のあたりがむずむずする。

なんだ？ と思ひながら額に意識を向けると、不思議な情報が浮かび上がつた。

【個体名】ハヤト・コウサカ

【種族】犬・雑種 L V . 3

【称号】森の野犬

【職業】野犬

【パッシブ・スキル】野生の勘

【アクティブ・スキル】なし

まるでゲームのステータス画面のようだ。

なぜ急にこれが気になったかというと、すぐに理解できた。

おそらく、この身体（図らずも本当に犬だとこれで証明されたわけだが）にあつた記憶だろうが、以前は「Lv.2」だったところが「Lv.3」になっている。レベルが上がったのだ。

ホーンラビットを殺したことによってレベルが上がったのだろうか？

というか、【個体名】ハヤト・コウサカって、まんま私の名前ですか。これってどうしたこと？

私が憑依したからこうなったのかどうか。まあ、今氣にしてもわかるわけもないか。

ちなみに、このステータス画面？は日本語で書かれているが、私が憑依される前の犬が日本語を読める、というわけではないだろう。実際は日本語で書かれているように「感じる」、というところだ。このステータス画面も、空中に投影されているわけではなく、何となく脳裏に浮かび上がった、というか。

要するに、本来は文字とかではなく、意味とか、概念とか、そういう情報が直接脳に与えられている気がする。私が日本語に感じるのには、単に私が日本語で思考するために、この情報が脳内で日本語に変換されているのだろう。

ふむ。

しかし、ステータス画面が出るなんて不思議なこともあるもんだ。しかも犬・雑種だし。犬でもステータスは見れるんだね……つていふか、雑種で。もう少しなんとかならなかつたのか。魔狼とか、魔法が使える魔獣系の存在とは言わないから、せめて狼にして欲しかつた。この世界で魔法が使えるかなんてわからないが、ステータスなんて見えるくらいだ、魔法だつてあつても驚かない。それにステータス画面にあつたスキルという欄。今は「野生の勘」しかないが、いずれ増えるかもしね。魔法的な何かだつて覚えるはず。いや、覚えたい。

犬だつて賢い動物には違ひないが、狼はその犬よりも3倍だか何

倍だか忘れてしまったけど、脳が大きかつたはずだ。つまりそれだけ賢い、ということ。人間の頃のように思考できる今は関係ないかもしれないが、何となく犬より狼の方が頭良いし強そうだ。種族的にも狼の方が上位だろう。

いや、まあ、この世界に狼がいるかもわからないんだけどね。しかし、それにしても。

雑種で。

なんだか落ち込むわ。

「ウオフ……」

まあ、ひとまず今はいい。

とにかく今は、食事だ。

私はステータス画面から意識を逸らすと、ホーンラビットの腹に噛みついた。

……ホーンラビット、うめえ。

## 第一話 ハーフリンと犬

1.

私がこの世界に来てから一週間ほどが過ぎた。

あれから何をしていたのかといふと、もっぱら森の探索と餌の確保である。まあ、確保といつても狩つたらすくに食べているのだが。おかげでレベルも上がった。

【個体名】ハヤト・「ウサカ

【種族】犬・雑種 L<sup>v</sup> . 6

【称号】森の野犬

【職業】野犬

【パッシブ・スキル】野生の勘

【アクティブ・スキル】なし

以上が今の私のステータスである。

私がここに来たとき L<sup>v</sup> . 2 だったことを考えれば、たつた一週間で四つもレベルが上がつたことになるが、私が狩つた生き物などホーンラビットだけで、しかもその数は一田<sup>2</sup>～3匹ほどでしかないのだが、私が憑依する前の犬はいつたいどうしていたのだろうか？ いくらなんでも L<sup>v</sup> . 2 は不自然なほど低い。

それとも、ホーンラビットを食つたことがあるのは数えるほどしかなく、普段は別のものでも食つていたのだろうか。

まあ、ほかにも私が現在1日に狩つているホーンラビットが多い、ということも考えられる。他の野犬だと、普通一日に何匹も狩らないのかもしれないな。事実、一匹狩れば十分お腹いっぱいになるのだ。

それでも私がホーンラビットを狩るのにはわけがある。

といつても、単にレベルを上げたいだけだが。

やはりレベルを上げると身体能力が上昇するようだ、このどんな危険があるかわからない世界で生きる以上、強くなつておいて損はないだろつ。それに私はRPGをやっていてもレベル上げに情熱を燃やすタイプだつたしな。

一匹食えば十分なホーンラビットを一日に何匹も食えるのか？と思われそうだが、なぜかレベルが上ると空腹になるのである。身体能力上げるのにエネルギーでも使つてはいるのだろうか？

そうそう、ホーンラビットをあつさり狩れることについてだが、あいつら足は遅いわそこら中にいるわで、実際のところ入れ食い状態だ。何しろ角にさえ気をつければ怪我を負う心配もないで弱い。あんな生物が良く生き残つているものだと疑問に思つほどだ。あんなに狩りやすい生き物なんてすぐに絶滅してしまいそうなものだが、この森だけでも大量にいるのである。不思議だ。

ともあれ、今日の私はここに主食と化しつつあるホーンラビットのことは忘れ、別な獲物を狙つてはいるのである。

そいつはこの世界に来た翌日、偶然見つけたのだが、苦戦しそうに思えたのでその時は逃げたのだ。

緑色の肌に一足歩行する人間の子供くらいの体躯。盛大に尖つた鼻と耳。醜悪な面の中でなぜだかつぶらに見えてしまう瞳。

ファンタジーな世界代表ザコモンスター、ゴブリンである。

2 .

森の中を進むと街道らしきものが見えてくる。といつても、アスファルトや石畳で舗装されているわけではなく、単純に土が踏み固められて草が生えていないだけの原始的なものだが。

その街道には細い溝が走つていて、おそらく馬車か何かの跡ではないかと勝手に推測しているのだが、今は無視だ。

この街道から少し外れて森の奥へと一時間ほど走り続けると、「

ブリンの集落があるのだ。

これまでの探索で分かつた成果である。それ以外にも水場（川だ）の場所なども判明している。街道の事と合わせて、この三つが主な探索の成果だ。

ゴブリンの集落には向かわず、その周辺の森を探索してみる。まあ、集落になんか今は危険すぎていけないし。なるべくといつか、一匹（それとも一頭？と呼べばいいのだろうか？）でいるゴブリンを狙うつもりだ。複数いるとこちらがやられてしまうだらう。しばらく森の中を探索する私。

すると 野生の勘 に何かが引っ掛けた。

ちなみに 野生の勘 のスキルは、こうして狩りをするときに獲物を見つけるのに役立つ。ホーンラビットもこれで探してたし。だが一度以上遭った生物にしか効果はないらしい。狼や他の野犬がいるかなと思つて探してみたことがあつたのだが、まったく感に引っ掛けられなかつた。事実、こうして私がこの森にいるのだから、狼はともかく他の野犬くらいいそつなものだが。

ともあれ、ゴブリンは何度か森の中で見かけた相手である。

野生の勘 に従つて森の中を進むと、実にあつさりと見つけることができた。

私の視力で、出来る限り遠くから目視できる距離を保ちつつ、発見した緑の小人を確認する。

どうやら一匹のみのようだ。

腰に何やらぼろい毛皮を巻いている以外は、ほぼ全裸である。右手に木の棍棒、左手に絶命しているらしいホーンラビットをぶら下げている。

狩りの帰りのようだ。

このまま後をつけても、ほどなく集落に辿りついてしまうだらう。そつすると襲うのは難しくなる。襲うならば今しかない。

幸い、向こうのゴブリンは刃物の類を持っていないようだ。何度も目撃したゴブリンの中には、鍛びたナイフやボロボロの剣を持つ

てこるやつもいたからな。もし刃物を持っていたら、襲うのは断念せざるを得なかつただろう。たとえ首筋に噛みついても、刃物を突き立てられると治療する術のない今は死んでしまう可能性が高いからだ。野生では少しの傷も命取りになる。化膿してしまつたら肉が腐つてしまつからだ。

刃物を持つていないとはいえ、さすがにホーンラビットよりは手強いだろ？。

多少、緊張しつつも、私は遠回りにゴブリンの背後へと回つた。そして大きな足音を立てないように近づいていく。全力で走らず、速足くらいで駆ける。

ゴブリンとの距離が近くなるほどに、むりに速度を落とし、足音と気配をできるだけ殺していく。

まだゴブリンは気付かない。

距離が10メートルを切つた辺りで、私は一気に飛び出した。

「ウォンッ！…！」

まだ振り向かないゴブリン（馬鹿だ）にわざと吠えることで、こちらを振り向かせる。

直後、私は地面を蹴つて跳んだ。

振り返つたことでこちらを向いた首筋に噛み突き、牙を突き立てる。

「ギギーサッ！」

悲鳴を上げながらも、ゴブリンは持つていたホーンラビットの死骸を放し、左手で私の胴体の辺りを掴んだ。必死に引き剥がそうとしているが、そんな程度で引き剥がされる私ではない。

と、腹のあたりに強い衝撃。

「…………ッ！」

どうやら棍棒で叩かれたか突かれたかしたようだ。これがナイフや何かだったら私は死ぬしかなかつたな。まあ、だからこそ棍棒しか持つてないゴブリンを襲つたわけだが。

その後も強い衝撃が私の体を襲う。

しかし、私は「ゴブリンの首筋から牙を抜くことはない。より一層噛む力を込めて必死に耐える。

「……ギ、ギ……」

どれくらい経つただろうか。  
自分ではかなり長く感じたが、本当は数分もないだろう。  
ようやく、ゴブリンの体から力が抜け、地面に倒れた。  
私は突き立てていた牙を抜き、本当に死んだか確かめるため、ゴブリンの醜悪な顔面に爪を立てて引っ搔いてみた。赤い線が三本走るが、ゴブリンはぴくりともしない。

どうやら本当に死んだようだ。

私はというと、殴られた腹部がじんじんと痛みを訴えているが、それ以外は無事である。

オカアサン、ボク、ヤターヨ！

ゴブリン、ヤターヨ！

と、ひとしきり達成感と歓喜に打ち震えていると、

ローン

と頭に音が響く「感覺」

むずむずする額に意識を向けてみると、ステータスが浮かび上がつた。

【個体名】ハヤト・コウサカ  
【種族】犬・雑種 L V 7  
【称号】森の狩人  
【職業】獵犬  
【パッシブ・スキル】野生の勘  
【アクティブ・スキル】威嚇の吠え声

なんと、レベルが上がった。

ここ最近ではホーンラビットを5、6匹は倒さないとレベルが上がらなくなっていたのだが、ゴブリンは一匹倒しただけでレベルアップである。

それだけゴブリンが強いということか、それともホーンラビットが弱いということか。

一匹倒しただけでレベルが上がったのは正直予想外だが、これは嬉しい誤算だ。

レベル以外にも【称号】と【職業】が変わっている。森の狩人と獵犬だ。なんかカツコイイな。というか私、人ではないけど「獵人」で良いんだろうか？

さらに【アクティブ・スキル】が発生した。威嚇の吠え声って、さつきゴブリンを振り向かせたあれかな。まあ、これはどんな効果を持つのか要検証だな。

レベルアップして嬉しいが、喜ぶのはここまでにしよう。ここはゴブリンの集落が近いし、早く離れるべきだ。

私はゴブリンが捕まえていたホーンラビットを持っていこうか迷つたが、私の口は一つしかない。

ウサギはしぶしぶ諦め、私はゴブリンの首筋にもう一度牙を突き立て、ずりずりと引きずつて行つた。

3 .

私がゴブリンの死体を引きずつて来たのは、川近くにある木の洞で、現在はここをねぐらにしているのだ。しかもこの周辺にはホーンラビットくらいしかおらず、私の匂いでマーキングもしているので、私より弱いやつは近づかない。

ちなみに、マーキングしたときにわかつたが、私はオスだつた。変な話だがオスだと知ったときは安心したものだ。これがメスだつたりしたら、私は貞操の危機を迎えることがあるかもしれない。

犬にレイプされるなんて、想像しただけでトラウマである。

私は木の洞の中に運んだゴブリンに、さっそくかぶりついた。

食うのは主に内臓だけである。ホーンラビットも同様で、筋肉とかは筋張つて硬いしまずいのだ。いやまあ、ホーンラビットとかはちゃんと解体すればやわらかい肉がそれなりにあるに違いないが、牙と爪だけで毛皮をはがして全身食うのは面倒なのだ。

それに内臓が一番うまい、というのもある。

そんなわけでホーンラビットの食い残しはそのまま放棄していた私が、ゴブリンはそもそもいかない。はらわた食い散らかされた死体がゴブリンどもに発見された暁には、犯人探しで野犬狩りなど行われてはたまらないからな。

ここまで運んできたのは、川が近いので、食い終わつたら川に流してしまおう、という考えだ。

グチャ、ビチャ、クチャリ、と。

なんとも瑞々しい音が洞の中に響き渡る。

正直、今の私が食事している場面などモザイクなしの3Dスプラッタそのものなので、人間だつた頃の私なら即座に吐いていた自信がある。というか、そもそも仮にも人の形をしたゴブリンなど、食おうとも思わなかつただろうが。

それでもゴブリンを食おうと思ったのは、犬に憑依したためか、グロ耐性が異様に高くなつたためか、「ゴブリンを初めてみたときに『食いでがありそつ』と思つたからだ。

元の世界でも人間の死体をカラスどころかネコやイヌだつて昔は食つていたそうだし、食えると思ったのだ。

その結果。

(う、う、うめえ……っ…)

ゴブリンはホーンラビットより美味かつた。

なんというのだろうか、単純にうますぎがある、というよりは体中に力が漲るような感じだ。これはホーンラビットを食つたときにはなかつた感覚で、一番近いのはレベルアップしたときにこんな感覚を覚えていたな。まあ、レベルアップした時の方がはるかに強い感覚を覚えるが。

確かめるためにもう一度ステータスを見てみたが、レベルは上がつていなかつた。

いつたい何なのだろうか。

滋養強壮の効果もあるのか？

不思議である。

ともあれ、解らないものは解らないだろう。  
はらわたを食い終わつたゴブリンの死体をしつかり川に流し、ついでに水を飲んでから私は洞に戻つて眠りについた。

これからはゴブリンを積極的に狩りつかな、と思いながら。

## 第一話 精靈(?)と犬

1.

私がこの世界にやつて来てから一週間ほどが経つただろうか。あれから森の探索も安全を第一にしつつも進み、色々なことが分かつた。

まず一つ目、この森の事である。

どうやらこの森は東西に長く伸びており（この世界の方角がどうなっているかわからないため、便宜的に太陽が昇る方角を東とする）、東側の端には、私が住みかとしている洞の近くにある川が流れ込む、大きな川があった。こちらの大きな川がおそらく本流であろう。そして西側だが、こちらは遠目に見ただけだが、巨大な山脈が連なつており、その麓まで森が伸びている。

一方、北から南へはそれほど広がっておらず、いうなれば山脈の麓を底辺として、巨大な川に向かってどんどん細くなつていいくようなピラミット型（というには少々曲線的だが）になつていて。

以前、森の中に街道が通つていていたが、それは北から南へ森が細くなつている部分を横断するように通つていてるようだ。私の住処も、比較的この近くにあり、ゴブリンたちの集落はここよりさらに山脈側へ行つたところにある。

次に一つ目。

どうやらこの森には私以外の犬がいるようである。

というのも、そろそろ口課と化しつつあるはぐれゴブリン狩りの最中、私以外の犬を見つけたのだ。やつは黒い毛皮に尖った耳、良く引き締まりながらも躍動感あふれる筋肉質な体躯をしていた。その鋭くも凜々しい瞳はなかなかに理知的であった。強いて前の世界での犬に当て嵌めるならば、ドーベルマンと二ホンオオカミを足し

て一で割つたような、そんなカツコイイ姿をしていたのである。

しかし。

しかしである。

やつは三匹ほどゴブリンの集団に率いられていた。つまり、飼われていたのだ。

家畜である。

私は内心、その犬に侮蔑的な視線を投げかけていた。  
ゴブリンと一緒に飼われるとは、何たる情弱か！　私の同胞だと  
はとても信じられんね！  
などと思つていた時。

「ウォンッ！」

百数十メートル先で、その犬が吠えた。  
私の方を見て。

勢い良くこちらに向かつて走り出す犬。そしてそれを鈍足ながら  
も追う三匹のゴブリンたち。

やつべー……、気付かれたわ。  
や、やるじやない……。

少々、愕然とする私。そして今更ながらに私が奴らよりも風上に  
いたことに気づく。

これを教訓に今度からは風の向きにも気をつけねばならないか。  
ともかく今は逃げよう。

ゴブリンどもを狩り始めてから一週間、だいぶレベルが上がった  
とはいえ、刃物を持ったゴブリン三匹と犬一匹相手は、さすがに無理だ。

私は踵を返して逃げ出した。

だが、驚くべきことに一キロほど走つても、ゴブリンどもはとも  
かく、あの犬を振り切ることはできなかつたのだ。

このまま逃げるのも面倒だ。それになによりたかが家畜の犬一匹

に遅れをとる私ではないッ！

私は足を止めて振り向いた。

しばらく待つと、犬が私に追いついてきた。

「グルル……ツ！」

生意氣にも私に向かつて威嚇する犬。  
いいだろう。本当の威嚇がどういったものか、みせてやろうでは  
ないか。

「ウォンツツツ！……！」

威嚇の吠え声 を発動して盛大に吠える。

このスキルは格下相手ならば怯ませ、同等か格上相手ならば注意  
を一時的に引き付ける効果がある。

犬はビクッとした後、「クウーン……」と鳴き声を上げる。

「グルル……」

駄目押しで唸り声を上げる私。  
犬は踵を返して逃げ出した。

.....。

ふ、ふふふ、ふうははははははッ！

あれが尻尾巻いて逃げる、ということかね。まったく、情けない。

所詮は畜生か。ははは。

まあ、それもそのはず。

私の現在のステータスはこうだ。

【個体名】ハヤト・コウサカ

【種族】犬・雑種 L V · 1 3

【称号】森の狩人

【職業】獵犬

【パッシブ・スキル】野生の勘

【アクティブ・スキル】威嚇の吠え声、鑑定眼

そして、さきほど私を追つてきていた犬のステータスが、こうである。

【個体名】グギギ・ギギガ

【種族】犬・雑種 L V . 4

【称号】森の獵犬

【職業】獵犬

【パッシブ・スキル】野生の勘

【アクティブ・スキル】なし

所詮はL V . 4の犬など、L V . 13の私の敵ではないのである。というか、名前がグギギ・ギギガって、ゴブリンに名づけられたからか？ 懐れな奴……。

それにあの犬の【称号】が「森の獵人」ではなく「森の獵犬」なのはどうしてだろうか？

ん？

なぜ犬のステータスなど見えるかつて？

それは私の増えたスキル 鑑定眼 の効果によるものだ。これが新しい知識三つ目である。

ホーンラビットやゴブリンの肉ぱっかり食べていた私だが、森の生活にも少しずつ慣れてきた頃、ふと思つたのだ。ビタミンとか、どうしよう、と。

いや、肉や内臓にはビタミンとかちゃんと含まれているものの本で読んだ記憶はあるのだが、それだけでは摂取できないものもあつたような気がする。うろ覚えの知識なので何とも言えないが、壞血病とか脚氣とか罹つたら嫌だ。

野菜もちゃんと食べるべきだろ？

とはい、野菜などこの森の何処にあるのかわからないし。

野草とか食べるべきなんだろうか。

私はその日からいろいろな野草を見つければ匂いを嗅ぎ、この犬の体にもともと在った知識などをどうにか掘り出しつつ、かつ念のため少し食べては時間を置いて毒の有無を確認しつつ、少しずつ食べられる野草を見つけていった。

そんなことを繰り返しているときだった。

ローン

もはや恒例になりつつあるあの音の「感じ」え？ レベル上がった？ と思いつつ、私は額に意識を向けた。するとレベルは上昇していないが、【アクティブ・スキル】の欄に 鑑定眼 が増えていたのだ。

いろいろと検証してみた結果、このスキルはかなり使えることが分かった。

たとえば野草などに 鑑定眼 を使ってみる。するとこのよう見ええる。

【個体名】なし

【種族】草・ソシ草 L V . 1

【備考】食用草。塩と合わせて保存食に利用されることもある。

【個体名】なし

【種族】キノコ・マシュー茸 L V . 1

【備考】毒あり。命と引き換えに至上の快楽を得ることができる。

こんな感じで、見たい情報をある程度知ることができるらしい。ちなみにこの時は「食べられるかどうか」を念頭において調べた結果である。

しかし、これにも制限がある。

上のステータスを見てもお解りの通り、この世界の生き物にはたいていレベルがあるのだが、このレベルが自分よりも高かったり、あるいは自分よりも種族的に優位に立つものに対しては、情報を得られないことがある。

たとえば「ゴブリンなどはこいつ見える。

【個体名】？？？

【種族】妖精族・グリーンゴブリン Lv.?

上のステータスは Lv.4 の「ゴブリン」の場合で、これが Lv.3 の「ゴブリン」なら、なんとか名前とレベルくらいはわかる。しかし【称号】【職業】スキル欄は全く見えないのだ。自らより上位種、それもゴブリン程度の存在でさえ 10 レベルも離れていないところに情報を見られないとは。

「ゴブリン」ごとにこれとは、どんなだけ私の種族は弱いんだろうか。軽く落ち込む。

だが、まあ。それでも 鑑定眼 のスキルが有用であることに変わりはないのだが。

しかし、どうやらレベルに関係なく情報がまったく見えない存在もいるようなのだ。

2 .

満天の星空と煌々と輝く三つの月。

私は住処の近くにある川原で、一際巨大な岩に登り、見るともなしに「それら」を眺めていた。

「それら」とは、無数の光の粒である。赤い光、青い光、緑の光、茶色の光、白い光に黒い光。すべてビー玉ほどの大きさもない小さなものが、いつでもどこでも無数にある。

今、この場で、というならば、青い光と黒い光が一番多いだろう

か。

これらは 鑑定眼 に関係なく、実はこちらの世界に来た時から見えていた。

最初は勘違いかな、と思う程度だったのだが、よくよく目を凝らしてみると色とりどりの光の粒が無数に乱舞しているのである。一週間もこちらの世界にいる頃には、これは幻じゃないと思つようになつた。しかし、触つてみよう思い前足でワンコパンチを繰り出しても、あつさりとすり抜けてしまうのである。

触れないのではやり自分の目がおかしいか、幻なのか、とぐるぐると同じことを考えてみたり。

しかし、犬とか動物は人間には見えない何かを見ることがある、なんていうのは良く聞いた話だ。

鑑定眼 を覚えてから、すぐに使ってみたが、何も反応しなかつた。

しかし、その正体にはある程度の推測を立てている。

こいつら、精霊じやね？

だつて水場には青い光が、空には緑の光が、地面や森には茶色の光が、日中、熱せられた岩肌の近くには赤い光が、昼は白、夜は黒い光が多く見られるのだ。

私のゲーム知識的に、火、水、風、土、光、闇の精霊だと思つたが。

そうして精霊だと思つてみれば、精霊魔術を使いたいと思つのが人情だらう。いや、犬情だらう。

私は今日も彼ら精霊（仮）に向かつて、あらん限りの中二的呪文を唱えてみる。

風の精霊よ、契約により（していないけど）我的敵を切り裂け！

ウインドカッター！

「ウオオウ、ウォウウォウオオオ！ ウオウウオオー！」

しん……、と静まり返る川原。

当然ウインドカッターなど出るはずもなく。  
やはり犬では無理なのか、それとも犬語ではダメなのか。  
今日も私は頑垂れる。

良い歳して何をしていんだろうか、私は。  
我に返ると急激に羞恥心に襲われる。

と、精霊（仮）たちが私の近くに寄つてくる。  
私の目の前を左にゆらゆら、右にゆらゆら。  
あ。あ。あ。

ああ～～～ツ！

私は飛び上がった。

ピヨーン、スカツ、タシツ。  
ピヨーン、スカツ、タシツ。

何をしているのかといえば、飛び上がり（ピヨーン）、精霊にワ  
ンコパンチをくれ（スカツ）、着地する（タシツ）を繰り返してい  
るのだ。

どうやら「今田もまた」私の内に眠る邪悪な本性が田を覚まして  
しまったようだ。

精霊たちと戯れながら、今日もまた夜が更けていった。

## 第三話 狼リーダーと犬（前書き）

今回はちょっとシリアスかもしません。

## 第三話 狼リーダーと犬

1.

私は一匹のゴブリンと闘っていた。  
それ自体はいつものことなのだが、今日のゴブリンはナイフ持ちのゴブリンだ。

今までなら闘わず、逃げていた相手である。

「グルルル……」

木々が密生する森の中で、私はグルグルとゴブリンの周囲を回っていた。

「グギ、ギギ」

視線の先では威嚇なのか何なのか、ゴブリンも声を上げている。  
いつもなら首筋に噛みつくだけで倒せる相手である。ここに来た当初、あるいはゴブリンを標的に定めた当初ならば念には念を入れて、背後から奇襲していたが、レベルもずいぶん上がった今はでは真正面から闘つても負けはない。

しかし、それは首筋に噛みつくという行為が絶対に不可欠だ。急所を狙わなければ確実に殺せない。だが、それをすればゴブリンが絶命するまでの間、私が無防備になってしまつ。

ゆえに、刃物を持つゴブリン相手にこの戦法は選べない。  
ならば、まずは手に持つナイフを何とかしてしまおう。

周囲を回りながら 鑑定眼 でゴブリンのステータスを確認する。

【個体名】ギギ・ググ・ガガグ

【種族】妖精族・グリーンゴブリン Lv.5

【称号】盗人初級

【職業】森の盗賊

【パッシブ・スキル】子孫強制

【アクティブ・スキル】なし

レベルも低いし、戦闘に役立つスキルもない。  
このレベル差なら、何とかいけるだろう。

私は 威嚇の吠え声 を放つた。

「ウオウウ……ツーーー！」

硬直するゴブリン。

やはり、効いた。目の前のゴブリンは私より遥かに格下である証拠だ。

私はゴブリンが硬直したのを確認し、即座に駆ける。走る。跳びかかる。

目標は首筋ではない。

ナイフを持つ右腕だ。

ガチーンツー！と、音が鳴るほど全力で噛みついた。

「ギヤアウツー！」

悲鳴を上げて腕を振り回し、私を振りほどくとするゴブリン。  
私はそれにさらに噛みつく力を上げながら、全力で対抗する。顎以外のすべての力を抜き、顎だけに力を入れ、顎だけに意識を集中する。私は今、顎しかない。そう思い込む。

自分なりのツツのようなんだ。こうすると体の一部だけだが、力が増す気がするのだ。

ぶんぶんと思い切り腕を振り回すゴブリン。離れない私が、しかし。

何度もかに腕を振られた時、私はゴブリンによつて振りほどかれ、数メートルを宙に舞つた。

「ゴブリンの、腕」と。

「ギィ——ツ！」

ゴブリンの悲痛な声を聞きながら、私は空中で体をひねり、難なく着地した。

私の口には噉み千切ったゴブリンの腕が咥えられている。

レベルアップすると身体能力が上昇する。

それも10レベル以上上がるところまで違うのかと、私は感動していた。おそらく、もう少し硬いものでも今なら噉み千切れるだろうという確信がある。それほどに余裕があつたのだ。  
やはり私は強くなつた。

「グルル……！！！」

歓喜のまま獰猛に笑う、といつてもそのつもりなだけだが。

私は右腕と武器を失つたゴブリンに向かって、真っ直ぐ駆けた。あとはいつも通りの、ただの作業だ。

首筋に噉みつき、殺し。

ローン

「音」が鳴つた。

2 .

ゴブリンを倒したあと、いつものように自らの住処である木の洞まで死体を運び、ゴブリンにはまだ口をつけずにまず、ステータスを確認してみた。

【個体名】 ハヤト・コウサカ  
【種族】 犬・雑種 Lv.23  
【称号】 森の狩人

【職業】獵犬

【パッシブ・スキル】野生の勘

【アクティブ・スキル】威嚇の吠え声、鑑定眼

うむ。どうやらレベルが上がったようだ。

といつても、「LV・22から一つ上げるのに、七匹ものゴブリンを倒さねばならなかつたのだが。

ここ最近、どんどんレベルが上げにくくなつてきているのだ。やはりここいらで新たな狩り場を開拓する必要があるかも知れないな。

ああ、そうそう。

鑑定眼についてだが、ゴブリンとはいえ、「LV・5」と「LV・2」2の差があればさすがにステータスを見ることはできるよつだ。

私がこの世界にやつてきて、およそ一ヶ月ほどが経つていた。

今では精靈（？）については後で調べることにして、レベル上げに勤しんでいる。そのおかげというか、そのせいというか、ゴブリンの集落でも何やら警戒し始めたらしい、単独で活動するゴブリンを滅多に見かけなくなつたのだ。常に複数で行動しているため、狩りがしにくいくこと。

なのでゴブリンの集団をおびき寄せ、一匹ずつ足を何度も爪で攻撃して足止めとし、一匹だけ攻撃を加えなかつたゴブリンだけをさらに別の場所へ誘導するという、なんとも面倒くさい手間が必要になつてしまつたのだ。

さきほどのゴブリンについてもそのなどが、それでも普段は武器持ちのゴブリンを標的にすることはない。

今回は私がどれほど強くなつたか確かめるための試金石である。結果はまず上々と言えるだろつ。

この調子なら、武器なしの集団へらこなれば正面から撃破できうである。

私はゴブリンにかぶつつき、今日もそのまわわたを食いつ。

なぜだかわからないが、食えば力が増すような、不思議なはらわたである。この秘密もいづれは解き明かしたいものだ、と思つている。

そうして朝食となるゴブリンを食つた後。

私は森を西へ向かつて疾走していた。ゴブリンの集落がある辺りよりも、さらに西である。

今までなら警戒して行かなかつた場所だが、今回は狩り場開拓のためだ。少々の危険くらい冒す価値はある。それに今の私ならどんな奴相手でも逃げるくらいはできるだろう、といつて自信もあつた。

後から思えば、どうかしていたとしか思えない。

3 .

私が「それ」に気づいたのは、だいぶ山脈の福野付近へと近づいた頃だ。

周囲の森は山脈の方へ進めば進むほど険しくなつていいくようで、植生する木々も太く、生命力に溢れている。

私は愚かにも自らの力を過信し、周囲を警戒していなかつたことに気付いた。

二オイ。

私の本能に警鐘を鳴らす、危険極まりない臭いがする。急いで疾走を中止する。

しまつた。どうやら何者かのナワバリに入り込んでしまつたようだ。しかも私の全身の毛が逆立つ。この感じ、囮まれている？ こつちを見られている？

ナワバリの主たちは、すぐに姿を現した。

どうやら私は完璧に囮まれていたようだ。結構な速さで走つてい

たつもりだが、彼らにとつては走りながらも集団で囮めてしまつ程度の速さだつたわけだ。

私は井の中の蛙だつた。

狼の群。

それも見事な漆黒の毛に覆われている黒狼たちである。

皆、私よりも一回りほど大きな体躯をしてゐる。金色に輝く瞳からは知性と威圧が伝わつてくる。

なんという存在感か。闘わずとも解る。強い。おまけに鑑定眼を使つてゐるのだが、まったくステータスが見えない。彼らが私より遙かに格上の種だという証拠だ。

しかし、黒狼たちならばまだどうにかなつた。逃げるくらいはできただろうし、私のこの森で鍛えられた戦闘に関する感は、私と黒狼一匹とでは、わずかに私の方が強いと伝えてきている。

しかし、である。

本当に私は自惚れていた。

「やつ」が現れた途端、私の全身は竦み上がり憐れな敗北者になり下がつてしまつた。

きらきらと光り輝く水色の体毛。全高はゆうに1メートル50を超えるだろう。全長に至つては3メートル近い。瞳ばかりは他の黒狼たちと同じ色だが、この群の長なのだろうか？

水色の巨狼であつた。

目を凝らすまでもない。

やつの周囲に物凄い数の水の精霊（仮）が集まつていた。ここに水場はないというのにだ。

今のが来るべきではなかつた。

私は尻尾を股の間に入れ、無様にじりじりと後ろへ下がつていく。が、どうやら奴らのテリトリーに無断で侵入してしまつた私を巨狼はただで許すつもりはないようだつた。

「ウオオオオオオオオーンン……ツツー！」

巨狼が吠えた途端、奴の全身から青白い霧が噴出した。たとえるなら濃密な蒸気が僅かに発光しているような、そんなもやもやとしたもの。

次の瞬間、驚くべきことが起こった。

巨狼が出した霧（？）をその身に受けた水精霊たちが、奴の意を受けたように組織だつた動きをした。

中空に集まり球体を成す。

それは直径50センチほどの水の玉となって、私の方へ高速で飛來した。

とはいえ、ただ真っ直ぐ飛んでくる水の玉など避けるのは容易い。私はサイドステップで左に避けた。

ドオオオオンッ！ と。

背後で凄まじい轟音。

反射的に見やれば、私が背にしていた大木が、その半ばまで抉り取られていた。

もはや冷や汗も出ない。

避けなければ確実に死んでいた。

ともあれ、私は今の自分の状況を思い出し、とつさに後ろへ跳びながら前に向き直り、

目が、合つた。

近い。巨狼が目と鼻の先にいる。

奴は青白い靄を纏つた前足で、私を払つた。

爪を叩きこまれたのではない。ただ邪魔なものを退かすよつこ、足の甲（？）で払われただけだ。

だが、それだけで。

私は十数メートルを飛んだ。

大木に叩きつけられ、私の視界は一瞬途切れた。

4.

意識を失っていたのは本当に一瞬だ。

だが、巨狼からしてみればその一瞬だけで私の息の根を止めるには十分すぎる時間だつただろう。

全身を激痛に蝕まれながら、私は必死に起き上つた。

「クウ～ン……」

私の口から弱々しい声が漏れる。

無様だ、と思いながら巨狼の方を見れば。  
奴は私に背を向けて立ち去るところだつた。  
もはや私に微塵の興味もないとばかりに。  
巨狼に従い、ぞろぞろと去つていく黒狼の群。  
私は森の中に取り残された。

人間だつた頃、私は喧嘩などあまりしたことがなかつた。臆病な奴と言われば、そうなのかもしれない。不良など遠くから見るだけで忌避したものだ。

要領よく。安全に。

それが私の人生の指標だつた。

が、しかし。

一匹の獣となつた今の私にとつて、果たして要領よく、安全に、などと言つことが正しいのか。

いや、違うな。

私がどうしたいかだ。私がどう生きたいかだ。

ここには煩わしい人間関係も、いちいち行動を制限してくる法律もない。

ならば。

私の心はすでに決まつていた。

男なら一度は夢見たことがあるはずだ。私がゲームでさえ強くなることに拘っていたように。

帰り道。

とても軽快とはいえない速度で歩きながら、私の胸中は反骨心で溢れ返つてしまいそうだった。あの時の巨狼の態度を思い出せば、私の無様さや惨めさと共に怒りや憎悪に近しい感情が湧いてくる。私の腹は決まっていた。

最強。

それを田指す。

ならばまずは、手始めに巨狼を倒すことから始めよつではないか。

## 第三話 狼リーダーと犬（後書き）

はやく犬を人里に下ろしてしまいたいんですが、あと数話はかかりそうです。

それに戦闘シーンを描写するのはやはり難しいですね。

次回は犬強化回です。

## 第四話 魔力覚醒と犬（前書き）

一話にまとめようと思つたのですが、少々長くなつたため、私の力不足で強化回は一話に分けることになりました。

## 第四話 魔力覚醒と犬

1.

私は狼リーダーに敗北した日から、いかにすれば憎いあやつに勝てるかを考え続けた。  
まずは論理的に、私が狼リーダーに優っている部分を考えてみよう。

レベル……は、どうだろうか。負けてはいない気がするが、種族として圧倒的に格下であるため、これを比べるのは無意味だろう。  
種族……論外である。

称号・職業……見えなかつたし。きっと負けているだろう。あつちは群の長だし。

身体能力……論外である。

スキル……奴は精霊魔法（仮）を使いやがる。忌々しい。

知能……狼リーダーと目を合わせたとき、まるで思慮深い人間のような瞳だと感じたのだが、それでもこれだけは勝つていると信じたい。もと人間のプライドにかけて。

勢力……1対?? 勝てるわけがねえ……。

財力……フツ、互角だぜ。

これら情報から、私はある結論を導きだした。

か、勝てない、だと……ツ！？

残念ながら、私は起死回生の奇策を思いつけようつな頭脳をもつていない。なにか策をもつてして、というのは無理だろ。なにしろ向こうは群だし。よしんば狼リーダーだけをおびき出したとして、どうする？ 落とし穴でも掘るか？

いやしかし、深く掘っている途中に私が穴から出られなくなりそうなので却下。

その他の罠は……犬の身でどうしようと。

となると、取れる手段としてはどうにか1対1に持ち込んだ後、タイマンで奴に勝つしかない。だがこれには奴よりも強いことが絶対条件だ。

……絶望した。

種族的格差社会に絶望したツ！

2 .

などと思ったのが一年ほど昔。

私がこの世界に来てはや一年以上が過ぎていた。

今現在。

私は八匹のゴブリンと三匹の獵犬どもに囮まれている。

しかもゴブリンどもは七匹が武器持ちだ。

今日、いつも通りにゴブリン狩りに来た私だが、どうやら逆に待ち伏せされていたらしい。

狼リーダーに敗北してからの一年、私はそれまでよりも精力的にゴブリンどもを食つて食つて食いまくった。私の体の八割はゴブリンで出来ています、と言つても誇張ではないだろう。それくらいに食つた。

そんな日々が続けば、いかに繁殖力旺盛なゴブリンどもとはいっても、数が減つてくる。

ここにところゴブリンたちの集落を偵察するのは欠かしていいないため良く知つてゐるのだが、おそらくこの世界の人間だらう女たちが何人も攫われてきいた（元の世界の人間とそつくりだつた）。

それ自体はいつものことなのだが、ここ最近はとくに多い。

ゴブリンたちの集落は森の中にある洞窟（どうやら地下に続いているようだ）と、その周囲に木造のみすぼらしい小屋で構成されている。小屋は木の柱に草をかぶせて屋根にしただけの原始的なものだが。

女たちはどうやら洞窟に連れ込まれてナーヤラされているようだ。ゴブリンの【パッシブ・スキル】に子孫強制なるものがあつたので、それで無理やりゴブリンの子供を産ませられているのだとは想像がつく。といふかお約束だらう。

通常ならば、それで数が次から次へと増えていくわけだが、私が狩りまくつているせいでのここのところはそれでも減少傾向にある。攫われた女性たちを助けようかと思つたのだが、さすがにゴブリンの集落に単身乗り込むのは危険に過ぎる。おまけに女性たちは洞窟の中にいるのだ。入口を固められでもしたら、一方的になぶられて終わる可能性が高い。

ゴブリンどもめ。

いつか必ず滅ぼしてやる、と私は密かに決意した。  
なぜならお前たちのその行為は、すべての女性を辱め、すべての童貞を侮辱するに等しい行為だからだッ！？  
断じて。断じて許せることではないッ！

「ウオオオオウツ！？！」

私の 威嚇の吠え声 が周囲に響き渡る。

ゴブリンも犬も、その場にいた全てが硬直する。

ただ一匹を除いて。

武器を持つていな唯一のゴブリンである。

私は他のすべてを無視して、武器なしのゴブリンに向かつて突貫しつつ 鑑定眼 でそのゴブリンのステータスを確認する。

【個体名】ギギ・ギャウ・ガウガ

【種族】妖精族・ゴブリンメイジ L V · 14

【称号】魔術師初級

【職業】魔術師

【パッシブ・スキル】子孫強制、魔力覚醒、平静なる精神

【アクティブ・スキル】構成魔術

ゴブリンメイジ。

魔術を使うゴブリンの上位種である。しかしいかにゴブリンメイジとはいえ、L V · 14程度では今の私の 威嚇の吠え声 に対抗することなどできない。それでも硬直しなかつたのはスキル 平静なる精神 のおかげだろう。

今まで何匹ものゴブリンメイジを倒したが、 平静なる精神 のスキルを持つていたのはこいつが初めてだ。その効果はおそらく精神系異常に対する耐性の上昇といったところか。

明らかに今までのゴブリンメイジでは一番の強敵。

しかし、巨狼の狼リーダーと比べればヘラクレスオオカブトと団子虫くらい違うッ！

私は四肢へと『魔力』を纏わせた。

同時に脳へも『魔力』を巡らせ、思考速度を強化する。

私の体は爆発的に加速した。視界の中でゴブリンメイジが『本』を片手に魔術の詠唱を行っているが、もはや私の意識上ではスローモーションにしか感じない、絶望的に遅い速度だ。詠唱は間に合わない。

駆け。跳び。

私はゴブリンメイジの頭へと『魔力』を纏わせた右足を叩きつけた。

ボンッ！

と、爆発の「」とき轟音。

私は着地と同時に背後を振り返り、ゴブリンメイジの末路を見た。頭部が爆散し、首なしなつた体がぐらり、と揺れて地面へ倒れた。

今私の動きを目で追うことすらできたかどうか。周囲のゴブリンと犬どもの纏う霧囲気が明らかに変化した。

すなわち、怒りから恐怖へと。

威嚇の吠え声 の効果ではない硬直が、彼らを襲っていた。

私は悠然と振り返り。

ゴブリンどもでは反応できない速度で飛び出した。

3.

結局、ゴブリンどもは皆殺しにしたが犬どもは逃がしてやつた。飼われる身とはいえ、私の同族であることに違いはない。

私はゴブリンハ匹全員のはらわたをしつかりと食した。

特にゴブリンメイジは美味である。

多少どころか腹が膨れて痛いくらいだが、確証はないものの強くなるためには必要なことである。

ゴブリンのはらわたを食つたときに得られる力のようなもの。

その正体に一応の回答を得ることができたのは、私が狼リーダーに敗れた一月後のことだった。

私は何とか精霊魔法を使えないかと、日々修行に励んでいた。

狼リーダーが精霊たちに与えていた青白く光る靄のようなもの。

精靈魔法を使うには、おそらくあれが必要なのではないか、ということにはすぐに思い当たつた。なのであの靄をどうにか自分も使えないかと色々と試してみたのだ。

滝に打たれて修行したり。

断食してみたり。

瞑想してみたり。

今にして思えば一定の効果はあつたのだろうが、あの靄（便宜的に『魔力』と呼ぶことにする）を発現させるには至らなかつた。そのときは気付いていなかつたのだが、私には絶対的に保有する『魔力』が足りなかつたのだ。

考えてもみて欲しい。

私は、犬だ。

雑種である。

いや、雑種を馬鹿にするわけではない。雑種はすばらしい。野生で生きるならば人工的に交配させられて種を保つ血統種のような存在より、適応力の高そうな雑種の方が良いに決まつてゐる。

だが、である。

犬。

犬なのだ。

私のゲームやアニメ、ラノベ的知識を持つてしても犬が魔力を持つてゐるというのも考えにくいものがある。私は失念していいたわけだが、あの靄が仮に本当に『魔力』に相当するものだつたとして、果たして人間でさえ持つてゐるものは一部ではないだろうか。あるいは魔術として使えるレベルの者が一部、と言つたほうが良いか。私が知る偉大な犬なんて、ハチ公やラードくらいのものである。犬は魔力を持たないのではないか。

そんな事は考えもせず、私は修行に励み、ゴブリンを食し、たまにデザートとしてホーンラビットを食し、そんな生活を続けていた。ある日。

私は初めてゴブリンメイジなる存在に出会った。奴は武器ではなく、人間から奪つたもののかどうか、本を握つていた。

奴の他には武器なしのゴブリンが一匹だけだつたのは、幸運という他ない。

何やら「ギギ、ガガ、ギャウギャウ」と意味解らんことを唱え始めるゴブリンメイジ。

なにこいつ。馬鹿なの？  
と思ったのも束の間。

ゴブリンメイジの体から噴き出す『魔力』

狼リーダーよりは遙かに少ない量のそれが、ゴブリンメイジの持つ本へと注がれていく。そして詠唱とともに本の輝きは強まっていく。

ボウッ！

と、ゴブリンメイジの頭上に出現する火の玉。

直径30センチ程度の小さいものだが、狼リーダーの時のことを思い出せば見かけ通りのかわいい威力だとはとても思えなかつた。飛来する火の玉を、できるだけ引きつけてから大きく横に跳んで回避する。

盛大な爆音がした。

あまりの爆音に頭が揺さぶられたかと思つまどじだ。  
多少朦朧とした意識の中で、火の玉が衝突した地面を見た。  
クレーター。

が、できるほどではなかつたようだ。しかし下草はすべて弾け飛び、その下の土も薄くだが抉られていた。そして黒く焦げる地面。当たつたら、またしても死んでたな。

私は考える。

ゴブリンが火の玉を放つた時、火の精霊たちは全くと言つていいほど集まつてきてしまつた。ということは、狼リーダーとは別の理論に基づく技、ということだ。

しかし、それ以上に。

「ゴブリン」ときが。

魔法か魔術か知らんが、ともかく使うとは。

実際に見ると衝撃である。

そして屈辱である。

今私は逃げなければならない。たかがゴブリンを前にして。そうして撤退しようかと思つた時だ。

ふらふらと目を回すゴブリンメイジがいた。あれ？ と思いつつゴブリンたちの周囲を木々を盾にするようにして回り始める私。

また魔術の詠唱をしてくるだろ？と思つていたが、一向に詠唱を再開する様子がない。それよりも何やらメイジさんはお疲れの様子だ。

まさか。

魔力切れ……？

「グルル……」

私は獰猛に笑つた。

魔法の使えないゴブリンメイジに何の価値があるだろ？

いや、ある。私の食糧としての価値が。

まったく。一瞬とはいえ私に恐怖を抱かせることは。この借り、100万倍にして返しますよー！？

私はゴブリンたちへ向かつて飛び出していった。

結果として、魔力のないゴブリンメイジ + 2のゴブリン軍団はあつさりと倒すことができた。

特に描写の必要も感じないほどのいつも通りの狩り風景である。しかし三匹も持つて帰るのは大変過ぎる。すこし危険だがゴブリンからは逃げれば良いし、この場で食べてしまおう。

そうして最初に口をつけたのは、もちろんゴブリンメイジだ。

いつも通りにはらわたのみを食べる私。

つま味ではない。体中に漲る力が、普通の「プリン」を食った時とは段違いである。

レベルアップの時よりもなお漲る力。  
そして気付いた。これはレベルアップとは全く違つ感覺であると。

「全身に漲る力と似たような、あるいは同じものを私は感じたことがある。

狼リーダーとゴブリンメイジだ。

ポン

来了。

私は微かな興奮を覚えながら、ステータスを開いた。

【個体名】ハヤト・コウサカ

【種族】犬・雑種 L V · 27

【称号】魔犬

【職業】狠犬

【パッシブ・スキル】野生の勘、魔力覚醒

【アクティブ・スキル】威嚇の吠え声、鑑定眼

スキルに 魔力覚醒 なるものが増え、称号が魔犬に変わっている。

もはや私は、ただの犬ではないのだ。

溢れだす歓喜を抑えながら、魔力覚醒 によって覚醒した魔力を開放してみる。

自らの体内に意識を向けると、はつきりと力強い何かがあるのが解った。

それを意思の力で誘導し、体を巡らせ体外に出してみる。じわり、と滲み出す青白い光の靄。

……やつた。

やつたつた。

これで狼リーダーに勝つるつ！

その可能性が遙かに高まつたのだ。

私はニヤリ、と笑つた。

計 画 通 り ！

ではないけれど。

## 第五話 身体能力強化と犬

1.

残念なお知らせがあります。

ワタクシ、犬は、精霊魔法が使えませんでした。

というのも、初めて魔力覚醒した日から私は精霊魔法を使おうと躍起になつて修行した。

住処の近くにある一際大きな岩に、いつものように座り、そこで魔力放出！

「ウオオオオオオンッ！！！」

狼リーダーのように叫んでみたり。

中二的呪文を唱えてみたり。

魔力を放出しながら色々やつてみたのだが、精霊たちは何の反応も示さなかつた。

……。  
ば、馬鹿なつ！

魔力だけでなく他にも何か必要だというのかつ！？

それとも私が犬だから、精霊たちに馬鹿にされているのか！？

ひとしきり困惑し、気を取り直す。

まだ。

私にはこれがある！

私はゴブリンメイジから奪つた『本』（住処の洞に運んでいたのだ）に魔力を流してみた。

残念ながら本に書いてある文章は読めなかつたが、使つた魔術はファイアーボール（仮）だつたので、それらしい「ぼくのかんがえたさいきょうのじゅもん」を唱えながら。

結果。

光り輝く『本』

どんどんと流れていく私の魔力。

シユウウウ……と大気に溶けていく私の魔力。

……魔力切れで倒れる私。

どうやら、精靈魔法を使えないばかりか私は魔力の保有量さえ少ないようだ。

2.

いつたい何ができるねん。

使えんわあ……。

使えへんわあ、魔力。

などと遠くを見つめる私の脳裏に、ひとつ目の光景がフラッシュバックする。

魔力を纏つた足で私を払う狼リーダー。

そして尋常じやなく吹き飛ぶ私。

吹き飛んだのは十数メートルほどだが、あれは途中で木に当たつたからあれくらいしか飛ばなかつたのだ。ならば、障害物もない場所でなら、いつたい何メートル飛ぶというのか。

それほどの膂力。

いくらなんでもどんな生物だよ。

ありえねえ……。

となれば、あれは魔力の持つ力の一つ、か？

私は全身に魔力を巡らせた。

魔力で筋肉のリミッターを外し、さらに肉体を強化するイメージ。狼リーダーのような凄まじい力を振るう私をイメージする。

なんだか体が軽い。

私は座っていた大岩から飛び降り、距離をとつた。その行動でさえ、いつもとは段違いのスピード。できる、という確信があつた。

私は助走をつけて大岩へ突貫し、  
跳躍して、空中で回転し。  
すべての体重を乗せた一撃を放つた。

ゴブリンメイジのファイアーボールなど比ではない、荒々しい轟音。

大岩は砕けなかつた。  
ただ、ピシリ、とヒビが入り。  
真つ二つに割れた。

ボーン

と脳内に響く「音」

私はステータスを確認する。

【個体名】 ハヤト・コウサカ  
【種族】 犬・雑種 L V · 27  
【称号】 魔犬

【職業】 猿犬

【パッシブ・スキル】 野生の勘、魔力覚醒

【アクティブ・スキル】 威嚇の吠え声、鑑定眼、身体能力強化

身体能力強化 は、どうやら魔力を使った【アクティブ・スキル】のようだ。

そして魔力を使うということは、どうやら使い方にも気をつける必要がある。

震む視界。脱力する体。プルプルと小鹿のように震える私。

今の一撃で、魔力をすべて使ったようだ。

マジ魔力低すぎだろ、と思いながらも確かな手応えを感じていた。時間は多少かかるが、これで何とかなりそうだ。

私は洞に戻つて眠りに就いた。

3 .

それから一年。

私は狼リーダーに挑まずに修行に励んだ。

やつた事は主に二つ。 身体能力強化 の効率的な運用の仕方と魔力保有量の増大だ。

身体能力強化 の効率化は、どこをどれだけ強化できるか。一部だけを強化できるか。この二つを調べることから始まった。その結果、足のみを特化させて強化することで臂力と速さを格段に上昇することができた。しかし、ここで一つ問題ができた。

あまりのスピードに私の知覚能力が追い付かず、森の中を走ると木々にぶつかってしまうのだ。

それを解決するために知覚を強化できないかと思ったわけだが、これはまったく問題なく強化できた。それ以外にも思わぬ副作用を生んだのだが、それはまたの機会にしよう。

次に魔力保有量の増大だが、この方法はおそらく二つある。

一つはレベルを上げること。

もう一つはゴブリンを食うことだ。特にゴブリンメイジのはらわたは大量の魔力を含むのでなお良い。

これはまだ私の推測に過ぎないが、大量の魔力を一度に取り入れると魔力を貯蓄する器のようなものを半ば無理やり拡張することができるのではないか。そうでなければ魔力を取り込んだことで保有する魔力量が増えることの説明がつかない。私は身体能力強化をする度に魔力を消費しているからだ。ただ消費されるだけでは、保有量が上がるはずがない。レベルアップではこの器のよつなもののが自然に成長するのではないかと考えている。

ともあれ。

そうしてレベルも上げつつゴブリン狩りを以前よりも精力的に行なうようになった私だが、半年前から何匹ゴブリンを倒してもレベルが上がらなくなってしまった。

今私のステータスはこれだ。

【個体名】ハヤト・コウサカ

【種族】犬・雑種 L V . 31

【称号】魔犬

【職業】獵犬

【パッシブ・スキル】野生の勘、魔力覚醒

【アクティブ・スキル】威嚇の吠え声、鑑定眼、身体能力強化

レベルは上がらなくなつたが、ゴブリンを食うことで魔力保有量自体は格段に上昇した。

感覚的には魔力覚醒した当初の5倍ほどだ。

しかし、もともと魔力が少なかつたので5倍といつても大した量ではなく、身体強化の効率的な運用は絶対に必要だ。ゴブリンメイジと比較すれば3倍ほどある。

今の時点では狼リーダーに挑むのは、まだ不安が残る。

魔力も上がったし 身体能力強化 も狼リーダーよりは巧みに扱えるだろ? という確信はあるが、何しろ存在の次元が違うのだ。やつは何か神聖な生き物であるような気がするし、何レベルになつても犬は犬。この不安はなくならないのではないかと思えた。

だからこそ。

私は決意した。

そろそろ狼リーダーに、一年前の借りを返しにいくことを。

4 .

走る。

魔力は温存しなければならないため、強化はなしだ。  
それでも以前の私と比べれば格段に速いスピードだ。

これは 身体能力強化 の副次的な効果で、わざと筋肉自体のリミッターだけを少しだけ解除し、肉体自体の強化をしないことで筋肉に効率的に負荷をかけることができる。このように肉体の強度というか耐久力を強化しない場合、筋肉が発揮する力自身で筋繊維は障害される。その後、休めば超回復によつて筋繊維は太く強靭になつていくわけだ。

単なる筋肉トレーニングを少しだけ効率的に行える、というだけだが、これを何度も繰り返すことで肉体自体の自力も底上げしたのだ。

これでも、狼リーダーに挑むには万全ではない、と思う。  
しかし、万事は尽くした。

ならば後は挑むだけ。

私は一路、西へ。

黒狼たちのテリトリーへ。

## 第六話 リベンジと犬

1.

最初、私は狼リーダーのみを黒狼の群からどうにか誘き出せないかと考えていた。

しかし、よくよく考えてみるとその必要はない。

あの時、狼リーダーは1対1で私と闘つた。そのとき周囲の黒狼たちが飛び出してくる気配はなかった。

それには二つ理由が考えられる。

一つ目、私が狼リーダーより遙かに弱いため、複数で襲う必要がなかったこと。

二つ目、あがが狩りではなく、私と狼リーダーとの勝負だったためだ。群の長は一番の強者がならなくてはならない。ならば、私と狼リーダーとの勝負が狩りでない以上、他のものが手を出してはいけない。狼は狩りは複数で行うが、「群の長を決める闘い」を複数で行うことはないだろう。

普通なら犬と黒狼（狼リーダーは水色だが）との間で「群の長を決める闘い」など起こるはずがない。だが、あの時でさえ私の力は黒狼一頭よりは上だつたのだ。ならば狼リーダーとしては1対1で闘う他ない。実際に群の長になり得る存在を無視するわけにはいかないからだ。

あの時、私は「長の座をかけた闘い」などしかけていなかつたが、私がテリトリーに入ったことでそう受け取られていた可能性もある。

よしんば、以前の闘いが一つ目の理由によるものだつたとしても、現在の私の力量ならば、二つ目の理由で狼リーダーとの1対1が実現するはずだ。

そんな打算を持つて、私は堂々と黒狼たちのテリトリーへと侵入

した。

しばらく進んだところで立ち止り、待つ。

私の嗅覚は、そして 野生の勘 は、黒狼たちがすでに私を囲んでいることを報せていた。

そうしてただ一頭、頭抜けた存在感と力を放つ奴が悠々と近づいてくることも。

木々の隙間から水色の巨狼が現れる。黒狼たちはすでに私の視界に見える位置で包囲を完了させている。水色の巨狼が、私の目の前に立つ。その黄金の瞳は私を睥睨していた。

「グルルルル……」

私は獰猛に笑う。

久しぶりだな、という意味を込めて。借りを返しに来たぞ、と伝えるために。

2 .

「「ウオオオオオオン…………ツ…………」

私と狼リーダーが声を上げたのは同時だった。

私は 威嚇の吠え声 を上げると共に知覚と四肢を魔力で強化。狼リーダーはただの吠え声だというのに、まるで物理的圧力を伴つたかのような咆哮で、こちらを威嚇してくる。と同時に魔力を全身から放出し、纏う。

さすがに、保有魔力量が段違いだ。私があんなことをすれば1分も経たない内に動けなくなるだろう。

しかし、まずは私の 威嚇の吠え声 が効果を發揮したようだ。狼リーダーではなく、周囲の黒狼たちに。

硬直する黒狼の群。

最初から彼らが襲つてくるとは思っていないが、それでも威嚇す

る意味はある。私と彼らの力の差を測るため。ひいては狼リーダーとの力量の推測も成り立つ。

ただの犬と黒狼。

種族的違いだけで、今私の 鑑定眼 は彼らには効かない。ならば 威嚇の吠え声 が効く道理もない。それだけの格の違いがある。

しかし、彼らは私の威嚇に硬直した。

私のレベルが高いから、ではないのは 鑑定眼 が効かないことが証明している。

ゆえに。

私の強さを証明してくれる。レベルやステータスに現れない、私自身の力を。

周囲の黒狼たちを見て、狼リーダーも私を見る目を変えた。すなわち、油断ならない敵を見る目へと。

油断させていた方が良いのではないか、とは私は思わない。多少、勝機が薄まるうが構わない。

これは私が受けた屈辱を返すための闘いだ。

だからたつた今から、狼リーダーと呼ぶのはやめだ。新たなる狼リーダーとなるのは私だから。だから貴様を、ただの巨狼と呼ぶ。

先手必勝。

最初に飛び出したのは私だった。

加速された知覚の中で、それでもなお高速で巨狼に肉薄する。その視界の中で、しかし最初の攻撃を加えるのは巨狼の方。膨大な魔力に引き寄せられた、膨大な数の精霊たち。

以前のような大きな球体ではない。ビー玉ほどの無数の水球たちだ。

それらが散弾のように私に向かつて飛来した。

ズガガガガガガガツ！！！

と、破裂音の盛大な重奏。

木々が抉れ地面が吹き飛ぶ。

しかし、その光景を私は見ない。もはやそこにはいない。

何者よりも速く私は駆ける。跳ぶ。

水の散弾があらぬ場所を穿つ前、すでに私は跳んでいた。

巨狼の頭上。

空中で回転しながら魔力を尻尾に集中し、その体毛までも利用して硬度を上げる。

鋼鉄のバッドすら容易く圧し折るだろう尻尾を、巨狼の脳天へと全体重を乗せて叩きつけた。

ゴガアアンツ！ と、鋼鉄同士がぶつかつたかのような轟音が響く。

衝突の反動を利用して、私は巨狼の背後へと跳んだ。

空中で体をひねり、巨狼を視界に納めて着地する。

今のでダメージを与えたか？ 否、頭を下げてはいるものの、ダメージはない。しかし衝撃はしつかりと届いているようだ。

追撃を加えるため四肢を再度強化し。

突貫。

する直前、ぞわりと、全身の毛が逆立つた。

瞬間、私は後方へ跳躍する。

大気を押しのけて、巨狼の全身から膨大な魔力が噴き出した。

魔力は瞬時に精霊の青に染まり。

ウォンンンツ！ という吠え声とともに。

巨狼を中心とした氷の華が咲いた。

地面から何本もの氷の槍が生えている。それが巨狼を囲む花弁のように見えるのだ。

やばかつた。

あのまま突っ込んでいたら確実に串刺しにされてしまう。  
さもありなん。

水だけではなく、氷すら操れるのだ。ますます想像通りの水の精  
靈だ。

私は巨狼の周囲を回りだす。

すでに黒狼たちは遠くへ退避しているようだ。しかし、その視線  
はいまだ感じる。

見届けるつもりか。群の長を決める闘いを。  
いいだろう。ならば魅せてやろう。

新たな長となる私の力を。

3.

私の切り札。

こんな序盤で使うつもりはなかつたが、想像以上に巨狼はタフだ。  
ならば出し惜しみせず、一気に決める！

私は知覚を強化する際、脳へと魔力を意識的に巡らせることで脳  
の機能自体を強化している。しかしそれは思考速度や認識速度だけ  
を加速させているわけではない。

当然だ。

私は思考だけを行う脳の部位を知らない。

私は認識だけを行う脳の部位を知らない。

ゆえに、脳の司るすべての機能を強化する。

その中で特に強化するものを選択する。これだけは脳の構造など  
知らなくていい。機能局在とは関係なく、ただ感覚的なものだ。

私はすべてを強化する。

その中から選択し、さらに強化する。

原始の感覚。情動。本能。

獣の、意志。

「グルウウウアアアアアツ！……！」

私は私の内から湧きあがる暴虐的な意志に身を任せた。  
叫ぶ。

なお巨狼の円周上を疾走する私を、巨狼の視線がとらえた。  
瞬間、私は跳躍した。

跳躍した。

木々を何度も跳躍し、

氷の花弁を飛び越えて、巨狼へと突貫する。  
右足の爪撃を見舞つた。

赤い花弁が散る。

## 第六話 リベンジと犬（後書き）

リベンジ回、まだ続きます。

## 第七話 狂獣化と犬

1.

これでこそ。  
やつと一矢を報いた、といふことか。

巨狼の左目の上を三本の傷が走る。

「ギヤアアオウウ……ツ！！」

噴き出す血しづき。確実に潰した眼球。苦鳴を上げる巨狼。  
私は地に着地すると同時に再度の跳躍。  
地から突き出す花弁の氷槍を足場に跳躍と爪撃を繰り返す。

跳躍。爪撃。

跳躍。爪撃。

跳躍。爪撃。

ヒットアンドアウェイを繰り返しながら、私は冷静に思考する。  
私の速度に巨狼はついて来れない。攻撃力は足りないが、爪撃の一瞬、魔力を爪に集中させているので確実なダメージは与えられている。どうやら急所だけは守っているようだが、このままいけばそれも時間の問題だ。防御が途切れた一瞬、喉笛を噛み千切つてやれば私の勝利だ。

跳躍。爪撃。

跳躍。爪撃。

跳躍。爪撃。

冷静に思考しながらも、しかし私の行動自体は獣の本能に支配されている。

身体能力強化 の部分活用によって、脳に眠る獣の心を活性化する。

仮にこれを『狂獣化』と呼ばう。

スキル、ではない。スキル内スキル、とでも呼ぶべきか。

しかし。

ただ獣の心を解き放つだけでは、身体能力がさらに上がるだけで総合的な戦闘力はむしろ減少する。攻撃にためらいがなくとも、容赦がなくとも、獣の心には技がない。意図がない。仕掛けがない。単調な攻撃では敵を恐れさせることなどできない。

本来なら、そんな意味のない、どころか弱体化さえしかねない技だ。

だが、私は私の中の獣を完全に御することができていた。  
なぜ？

あるいは私の魂が人間であることに関係しているのかもしない。私は人間のまま犬になつた、そんな半端な存在だ。

だからこそ、完全に獣になりきることなど、自ら望んでもできはないのだ。

そして、それで良い。

人と獣の微妙な均衡こそが、今のこの状況を生み出している。狂獣の力に人の知性。

強力な力を狡猾に、そして巧みに使う。  
これこそが私の切り札だ。

さあ、巨狼よ。

そろそろ決着としよう。

何度目の爪撃だったろうか。

もはや数えることに意味はない。その蓄積されたダメージは、既に巨狼の体を赤色に染めている。

見事に光輝いていた水色の毛並みは、どす黒い血液を滲ませて見るも無残だ。

そんな姿でも王者の風格を失わない巨狼は、やはり見事だった。しかし、それでも。

幾度目かの一方的な攻防。

跳躍。爪撃。間に合わない防御。

ふらり、とよろめく体。

き、た……ッ！

私は全力の全力で跳んだ。

巨狼が足を振り上げ、飛来する私を叩き落とそうとするが。

おそいッ！　！　！

私は歓喜とともにガラ空きの喉笛へと噛みついた。魔力を込めて牙と咬筋を最大強化。

ぐつと力を込め。

ずぶり、と突き刺さる牙。滴る血液の味。そして。

ドッ！　！　！

と、私は吹き飛ばされた。

3.

なんだ！？

なにが起きたッ！？

空中。

私は混乱に襲われていた。

なぜ？

どうやつて？

いつたい私は何の攻撃を受けたのか。

人としての私が混乱に陥つても、獣の私はこんな場面こそ冷静だつた。

空中で体をひねり、着地する。

視線を巨狼へ。

瞬間、理解する。

巨狼の体を大蛇のような水の塊が螺旋を描いて取り巻いていた。

私はあの水の大蛇によつて弾き飛ばされたのだ。

そしてその威力は決して軽視できるものではないらしい。

『狂獣化』状態の私は痛覚の大部分を遮断している。普通に行動するに支障のない最低限度の痛覚のみを残して。

ゆえに。

鈍い痛み、というよりは鈍い圧迫感がある。

肋骨にビビが入つたかもしれない。もし折れていたら今よりさらに呼吸がしにくいだろう。

痛みは無視できる。ならば行動に問題はない。

問題は呼吸が浅くなつたことだ。

確実に体力が削られる。

はやく決着を着けねば。体力とともに勝機が削られるに等しい。しかし、巨狼はそれを許してはくれないようだ。

「ウオオオオオウウ…………ツ…………」

咆哮と共に魔力が爆散する。

散布された魔力は氷の花弁へと浸透し、  
爆ツ！ と。

氷の槍たちは数万の鋭利な破片となつて周囲へと飛散した！

私は咄嗟に全身の体毛を魔力で覆うことで硬度を上げ、跳び上がり空中で勢いよく回転した。

無数の破片が私を襲う。しかしその大部分は弾くことができた。それでも数個の破片が毛皮を突き抜けたようだが、戦闘に支障をきたすほどではないと判断。

着地し、巨狼を見やると、こちらに背を向けて森の奥へ走つていく姿が見えた。

なんだとツ！？  
逃げるのか！？

馬鹿な、という呆然とした思いが湧きあがる。

今までは確かに私が有利に見えていたかもしれない。しかし今私はそう長く闘えない体となつた。それに巨狼が水の大蛇を纏つたことで実のところ私は攻め手を失つていたのだ。

それなのに、逃げる。

勝負の趨勢も解さぬ馬鹿なのか。

そんなわけがなかつた。

ドツ！ と飛来した氷の槍が一瞬前まで私がいた場所を貫く。木々の向こうで巨狼がこちらに視線だけを投げかけていた。まるでついて来いと言わんばかりに。

明らかに、罵。

ついて行つて得をすることなど私にはない。

しかし、ついて行かねば決着は着かない。

巨狼がここでは不利と判断したのなら、奴は私を全力で闘つべき相手と認めたということ。

巨狼にも誇りはあるはずだ。そしてその誇りを押し殺してまでそんな行動をしなければならないほど、追い詰めたということだ。この、私が。

ならば良し。

ついて行つてやるつ。

そうして全力のお前を、倒す。

4 .

森を走る。

しかし急ぐことはしない。

巨狼の二オイを辿つて先へと進む。

黒狼たちを警戒もしたが、彼らはやはり手を出すつもりがないようだった。ただ遠巻きな視線だけを感じる。

そうして巨狼のあとを追いながら、私は少しばかり後悔し始めていた。

森を進む内に精霊の色彩が変わつていく。

茶色から青色へ。

水場が近いのだ。

森を抜けた先に巨狼は待つていた。

かなり開けた場所だ。

湖。

直径にして一キロはあるだろつか。

それほどの大きさ。水の精霊たちの数が物凄いことになつてゐる。何か精霊にとつて特別住みやすい場所なのだろつか。

巨狼は湖面に立つてゐた。

まさかとは思うが、湖の中で闘えとでも？

だとしたら私は少々巨狼を過大評価していたことになる。ここまで直接的な（卑怯とはいつまい）罷、といふか、あからさまに自分に有利な場を持つてくれるとは。

それも良いだろ。

なんとなれば、私は巨狼など無視して帰るだけだ。こんな恥知らずと闘う理由などないのだから。

私の闘うべき理由が借りを返すことならぬ、それはもう達成されていることになる。

巨狼が、本当に恥知らずならば。

私の視線の先で湖面の水がドーム状に盛り上がり、巨狼を包み込んだ。

こびり付いた血液が落とされていく。

そうして水のドームは湖へと戻つていい、あとに残された巨狼は元の輝かんばかりの、見事な水色の毛並みを取り戻していた。

悠々と。

湖の中心からじらへ向かって歩み出す巨狼。

その身を護るように、さらに湖面から水が盛り上がる。今度は巨狼の足を云う云つていて。

それは鉤爪の形を成し、ぴしり、と凍る。四肢すべてがそつなり、さらに水は上へと伝つていく。

背部と頭部を覆い、まるで鎧のような形をとつて凍りついた。

一切の気泡を含まない、限りなく透明な氷だ。ただそれだけでも

かなりの硬度を誇るはずだが、まぶしいほどの精霊たちが宿つているのが見える。

当然、普通の氷であるはずがなかつた。

巨狼はようやく私の田の前まで来て、実にあつさりと湖から上がつてみせた。

その姿を近くで見て気づく。

爪撃で切り裂いた左目の三本傷が、すでに瘢痕化はんこんかしていた。

それに、他の傷場所からも新しい血が滲んでこない。

私が傷をつけた場所で、氷の鎧に覆われていない場所もある。つまり、氷で止血しているわけではない。あるいは、左目の爪痕をそうしたように水の精霊は治癒すら行うことができるのか。

それを卑怯とは言うまい。

それもまた、巨狼の力だ。

しかし、湖にいる膨大な数の精霊たちを利用したとはいえ、全身の治癒と氷の武装鎧。これだけのことをして、いかな巨狼とて魔力と体力は限界に近いはず。

これ以上の強化はない。

……そう思いたい。

ともあれ、自らの有利を捨てて私と同じ舞台上にたつたならば、鬪わない理由もない。

湖に来るためとはいえ、巨狼は一度私に背を向けた身だ。現在の私と巨狼の関係は事実上逆転していた。すなわち、巨狼が挑戦者へと。

再度向かい合う黄金の瞳にあるのは真摯な戦意だけだ。ならば、今度こそ正真正銘の最後。

これで決着が着く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1919ba/>

---

異世界で犬に憑依した

2012年1月8日21時21分発行